

源頼朝像はこれだ

山梨県 善光寺蔵

源頼朝の肖像というと、かつては神護寺蔵の国宝「伝源頼朝像」が定番であった。三十歳台の威厳に満ちた表情をした肖像画であり、誰でも知っている頼朝像であろう。しかし、1995年3月に米倉迪夫『源頼朝像 沈黙の肖像画』（平凡社）が発表され、「伝源頼朝像」は足利尊氏の弟直義の肖像であることが判明した。九分九厘、間違いない仮説だ。

ならば、真の頼朝像は何か。それを明らかにしたのが、拙著『源頼朝の真像』（角川学芸出版、2011年）である。すなわち、世に源頼朝像とされる絵画や彫刻は数多いけれど、江戸時代以後につくられたものがほとんどで、似ているはずもない。例外は、東京国立博物館蔵にある重要文化財の「伝源頼朝坐像」（彫像）だが、これもじつは北条時頼坐像の誤りであった。また、大英博物館に源頼朝像がある。これは神護寺の「伝源頼朝像」を写したものであり、鎌倉末期ないし南北朝時代の作品とされてきた。贋があって、源頼朝の肖像と明記されているので、神護寺の国宝肖像が頼朝像であることの証拠にされてきたのだが、この肖像もじつは19世紀につくられたもので、なんと600年以上も誤認されてきたのであった。そして唯一、鎌倉時代の造像であることが胎内銘に明記されている源頼朝坐像が、甲斐善光寺にあった。

この甲斐善光寺の源頼朝坐像を調べると、とてもすごいことがわかった。

第一に、この頼朝像は、妻の北条政子の命によって造像され、信濃（長野）善光寺に安置されていたものだったのだ。頼朝の死後まもなくに造像されたと判断でき、13世紀初頭の肖像彫刻なのである。鎌倉前期の頼朝像が残っていることだけでも驚嘆に値する。この頼朝像は等身大の堂々とした彫像であり、晩年の頼朝の面貌をリアルに写している。じつに威厳に満ちた、たくましい顔であ

る。これこそ、現存唯一の源頼朝像なのである。

第二に、なぜ頼朝像が善光寺に安置されたのかといえば、源頼朝と政子が、善光寺如来を深く信仰していたからだ。平安末期に信濃善光寺が全焼してしまったことは『平家物語』に語られているが、その善光寺の復興に力を尽くしたのが源頼朝と政子であった。真の源頼朝像が善光寺にあるのは、とてもふさわしいことなのである。

そして第三に、それがどうして信濃善光寺ではなくて、甲斐善光寺に伝来したのかといえば、それは川中島の戦いに行き着く。川中島の近くに長野善光寺はある。上杉謙信と武田信玄は、北信濃の領土だけでなく善光寺如来と善光寺をも奪い合ったのだ。そして信玄は、善光寺を根こそぎ甲斐に移してしまう。その時、源頼朝坐像も甲斐へ運ばれたのである。善光寺如来は一時、秀吉によって京都に移された後に、やがて長野に戻る。長野善光寺が復活するのである。しかし、甲斐善光寺はそのまま残り、今も巨大な本堂がそびえ立っている。境内に宝物館があって、そこに頼朝坐像は静かに座っている。その脇に源実朝坐像もある。やはり母である北条政子がつくらせた彫像であり、長野善光寺に安置されていたものだ。同じく実朝の面貌をよく写してある魅力的な肖像である。

甲斐善光寺の源頼朝坐像は、頼朝像の定番になりつつある。いずれ重要文化財に指定されるべきだとも思っている。というわけで、今度の『社会科学 中学生の歴史』でも、甲斐善光寺蔵の源頼朝像を図版掲載している次第だ。ぜひ甲府にある甲斐善光寺を訪れて、源頼朝坐像と同実朝坐像に直面していただきたい。（立正大学教授 黒田日出男）